

## 公開講演会「現代文化を問う」

渡 辺 公 三

### はじめに

この講演をしていただいたサラ・スレーリ・グッドイヤー、イエール大学教授（英文学）は、日本ですでにその作品『肉のない日』（大島かおり訳、みすず書房、1992）が翻訳され、自伝的な要素をくみこんだ、独特の文体と陰影豊かな比喩的な語法による現代パキスタン像の提示として高く評価されている。主著である“Rhetoric of English India”は現在翻訳が進められ近々、平凡社から刊行の予定と聞いている。またこの著書の第一章が『現代思想』の97年2月号に掲載されている。

ウェールズ出身の大学教授を母に、パキスタン人の鋭いジャーナリストを父として生まれたサラ・スレーリ教授は、インドとの緊張、バングラデッシュ独立からブット時代、軍人大統領時代にかけてイギリスおよびパキスタンで成長し、後アメリカに渡り文学を教授している。

その異文化交差の場での成長は、この講演の冒頭でも印象的に紹介されているが、それを背景においた文学研究は、より広く現代文化論、クレオール化する世界の未来、ポストコロニアル文学の可能性など、古典的な英語文学研究の枠には収まらない多くの今日的な問題への視点を提供している。

今回の来京は、東京でおこなわれた、東京外国語大学主催公開シンポジウム「文化の未来—開発と地球化のなかで考える」（1997年3月15・16日、朝日ホール）での特別講演（演題は「文化はどこへ行くのか—現代文化批評とポストコロニアル文学」）のため来日された機会を利用したものである。その開催の任に当たり、またサラ・スレーリ教授のご紹介の労をとって下さった川田順造東京外国語大学教授（当時、現・広島市立大学教授）にこの場を借りて感謝したい。

なお、講演の最初の部分は、上記の東京での講演の始めにおかれた自分の生いたちの紹介と同一の内容になっている。導入としてきわめて適切だと思われたので特に再話をお願いしたのである。ここで原文で再録することについてはサラ・スレーリ教授および川田順造教授のご了解をいただいた。この部分を含む東京での講演は、『世界』（岩波書店）の1997年6月号に、大島かおり氏によって翻訳され掲載されている。

講演当日の通訳は、中村忠男文学部助教授、若菜マヤ国際関係学部助教授および唐澤靖彦文学部講師に分担していただいた。